

本日は、歴史と伝統のある仙台 YWCA さん、1948 年創立から今に至るまで、長きにわたって、仙台の地に根を張って活動されて来られた仙台 YWCA さん、の定期総会前の、礼拝説教という重積を仰せつかりまして、非常に光栄に思っているところでございます。

また、常日頃から、私ども仙台夜まわりグループの活動を覚えて、様々なご支援をくださっていますこと、この場をお借りして、御礼申し上げます。

さて、今朝は、先ほどお読みいただきましたルカによる福音書 2:6-7 をもとに、皆様と分かち合いをして参りたい、と願っております。

このルカによる福音書 2:6-7、イエスキリスト降誕の出来事ですけれども、クリスマスの時期に取り上げられることが多い、今日は 3 月 2 日ですので、時期はずれではないかと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、けれども、この箇所には、イエスキリストの生涯そのものを指し示す、大切なキーワードがある、それは、7 節「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」

もう少しわかりやすく訳し直しますと、「宿には場所がなかった」となります。イエスが生まれた時にイエスには居場所がなかった、というのであります。

絢爛豪華な宮殿で、ふかふかなベッドの上、大勢の人たちからの賛美と祝福のもと、栄光に満ちた仕方でこの世に来られたのではなく、この世の只中に、しかも、高みにではなく、この世の低みの極み、すなわち居場所すら与えられない、取り残されたものの一人として、イエスはこの世に来られた、そして、その方こそ私たちの救い主だ、そうルカは語るのです。

私が大好きな版画があります。フリッツ・アイヘンバーグというドイツの版画家の、「炊き出しの列に並ぶイエス」と題された作品です。

皆様のお手元にお配りしましたが、炊き出しの場面です。片足を引きずりながら歩いている人、汚れきった服を着ている人、もう今にも倒れそうな人、それら炊き出しに並ぶ一人としてイエスは描かれています。

社会や共同体で取り残され、蔑ろにされ、そして居場所がない、そのような人たちの一人として、そして彼ら彼女らの痛みや不安を自ら体に刻みつけるような仕方で、イエスは生きて働いてくださっている、

居場所のない寂しさ、取り残された悲しみ、邪険にされる辛さ、痛み、その身に刻みつけるような仕方で生涯を全うされた、それこそが私たちの救い主、である、そう私たちは知らされているのです。

さて、そのような仕方でこの世に来られ、そのような生をまっとうされたイエスが指し示される、居場所、開かれた居場所とは、そのようなものであるのかをさ

らに掘り下げていきたいと思うのですけれども、先に申しあげました、居場所がない仕方でこの世に生を受けたイエスの活動、一言で申しあげますと、ハードとしての居場所、を定められませんでした。

今で言うところの教会、建物としての教会が広がっていったのは、歴史的に、あのパウロによる功績が大きくて、家庭集会という形での個々の家が中心になって、それが集まって教会という建物が形成されていったのですが、しかしことイエスに限って見ると、イエスは場所を定めず、巡回しながら人々や出来事に出会っていかれた、んです。で、その出会いの中身を象徴するような、イエスの言葉、に注目しますと、イエスが目指した居場所、ハードとしてではなく、ソフトとしての、出会いの内実が明らかになってくるのですが、

4福音書で最初に書かれたマルコによる福音書で、イエスが語った短い言葉、おそらくその多くがイエスに遡ると言われていますが、そのいくつかをピックアップしてみます。いずれも病や障害、生まれや職業によって差別されていた人たち、イエスが生きられた当時の社会において差別偏見の対象とされ、社会から取り残されていた人たちへの言葉ですけれども、

「あなたの名前はなんというのか(マコ 5:5)」、「手を伸ばしなさい(マコ 3:5)」、「真ん中に立ちなさい (マルコ 3:3)」、「自分の足で立ちなさい (マコ 2:12)」、「あなたは何をしたいのか(マコ 10:51)」、「開け (マコ 7:34)」

「あなたの名前はなんというのか」、まず名前を聞く、名乗り合うって関係づくりの一步です、おたくだとかあなたではなく、〇〇さんと名前呼び合う関係、大事。そして、「手を伸ばしなさい」、です。自分の手を伸ばしてあなたの人生を自ら獲得していきなさい、さらに、

「真ん中に立ちなさい」、「自分の足で立ちなさい」、あなたの人生はあなたが主役なんだから、あなた自身の足で立って進んでいきなさい、そして、何をしたいのか、あなた、どうしたいのか。他人任せ、烏合の衆でなく、あなた自身が、何をするのか、何が大事なのか、どこに向かって進むのか、あなた自身で考えなさい、ということです。

イエスは、病や障害、生活苦など、当時の社会から排除されていた人たちと出会い、深く関係を作り、その関係性の中で、生き直し、取り戻し、解放の人生を提案されていった。しかもそれは、上から目線で、あなたはこうすべきだ、こうしなければならない、世の中こうなっているんだから、という仕方ではなく、

自分が何を求めているのかを自分で考えて、そして、自分の足で立ちあがって、手を伸ばして自分の求めることを獲得してく、そのような、相手の尊厳を尊重しつつ、主体性を取り戻すかのような仕方で、あなたは何がしたいのかあなたが考えなさい、何が必要かを深く思い巡らせ、あなた自身で立ち上がり、自分の人生をその手で掴み取りなさい、人生のど真ん中を自信を持って歩いていきなさい、あなたそれをしていいんだ、あなたにはそれができるんだ、イエスはその出会いの中でそう、語り続けていった、のでありまして、そのような意味で、イエスが指し示された居場所、開かれた場所、というのは、究極的には、ハードとしての固定化された建物の中にはない、そうではなく、人と人との関係性の中で、人が人として、尊厳を持って、互いに認め合い、励まし合い、祈りあっていく、たとえ誰であったとしてもです、病気であろうが、障がいを持っていようが、野宿をしていようが、国籍が異なっていようが、です。イエスはその生き方の中で、社会や国や年齢や性別や、それらの壁を取っ払うようにして、出会い、痛みや悲しみ、喜びや笑いを共有された、のであり、そのような出来事が起こされる関係性の中にこそ、イエスがおられる場所、開かれた居場所である、そう思うのであります。

世知辛い世の中です。社会の管理体制の中で一人ひとりが孤立し、人のことなどにかまけていられるか、そのような風潮があります。少しでも遅れたり、失敗したり、周りとは違う生き方をしていると、すぐに弾き出され、再び人としての尊厳を持って生きることができなくされていく、そのような社会であります。それは、まさに、イエスが生きられた時代と一緒にあります。

しかし、そのような社会にあって、イエスは、出かけて行って、人と人とを結びつけ、尊厳や主体性を取り戻させ、そして、互いに心配し合い、考えあっていく、そのような関係づくりをその活動の中心とされた、それは、繰り返しになりますが、それこそが私たちの居場所、誰に対しても開かれた、本当の居場所があるのだ、とその生き方を通して神の国を表された、のであります。

今年の1月1日、能登半島で大変な震災が起こって、多くの方々がなくなり、今なお大変な中にある人たちが大勢おられます。私は、13年前の東日本大震災の被災者の一人として、当時、仙台夜まわりグループの一員として途方に暮れながら涙流しながら被災者支援の炊き出し等を行ったことを昨日のように思い起こすのですが、現在の能登半島の人たちの窮状を、まさに我が事として、胸が締め付けられるように思わされています。

そんな中、先月 2/3 に行ったセミナー食事会という支援活動の際、仙台市内の路上生活者を対象としたアンケート調査をしました。

設問の一つに、「能登半島の被災者に思うことを自由に書いてください」というのがありまして、仙台市内の路上生活者たちが答えてくれました。

たとえば、「お見舞い申し上げます」。「光は必ずあるから頑張ってください」。「頑張ろう」。それぞれ思いのこもったメッセージを書いてくれました。

その中で、非常に印象深い回答がありました。こういうことを書いてくれた路上生活者がいました。

あの東日本大震災の時、自分も被災して家も仕事も家族も全てを失ってしまった。途方に暮れて苦しくて、苦しくてたまらなかった。

そんな時、しきりに頑張れ、頑張れ、頑張ろうと言われ、自分自身とても重荷で、辛く悲しかった。自分がそうだったから、今、自分は、能登半島の人たちに、頑張れ、という言葉ではなく、辛いよな、悲しいよな、苦しいよな、という言葉をかけてあげたい。

私、ここにイエスのありよう、イエスがおられる原風景を思いました。

それは「共感」です。もっといえば、他者の痛みを我がこととする真実であります。

福音書には、「イエスはあわれに思った」という言葉、繰り返し登場します。これも大切なキーワードの一つです。

「イエスはあわれに思って」（マコ 1:41）の「あわれに思う」というのは原典で、「スプラクニゾマイ」というギリシャ語が使われていて、直訳すると「腸が焼ける」「はらわたが痛む」という意味になります。

マルコ以外でも、みなさんご存知の、あのルカ 10 章の良きサマリヤ人のたどえの中での 10 章 33 節です。正統的な宗教者ではなく、違法の民と差別されていたサマリヤ人の、「スプラクニゾマイ」、憐れに思うという「腑の思い」をイエスは評価されています。

第三者的立場で、ああおかわいそうに、お辛いでしょ、頑張ってください、頑張りましょう、ではなく、はらわたが痛くなるほど、はらわたがちぎれるほど他人の窮状を我がこととしていく、自分が当事者となっていく、そのような「共感」です。

これに一番近いのは、沖縄の言葉で「チムグリサン」「肝（肝臓）が苦しい」

です。内臓が苦しい、それほどまでの共感、他者の窮状や悩みを我がこととする、それが、居場所のない仕方での世に生を受けたイエスの出会いの中心でもありました。

互いに共感し合い、その中で互いの尊厳を認め合う、大事にしあう、公にしあう。共感する仲間たちが集まってくる。そのような関係性が成り立つ居場所、そこからその真実を発信していく居場所、そのような YWCA さんであれば、どんなに良いか、そう思われます。

私は路上生活者、生活困窮者支援を 24 年間続けてきました。それは、あのイエスの居場所づくりを後追いするような、そのような思いがその根底にありました。今も毎日の活動を通して、イエスの足跡をたどり続けています。

ここにおられる皆さんお一人お一人のテーマがあると思います。それは、路上生活者支援に限らず多くのテーマがあると思う。それぞれ生きる現場で、日常で、出逢われていく課題や対象、テーマがあるのでしょうか。そのような飛び込んでくる、出会わされていく、やらずにはおられなくなる、それぞれの課題、それはイエスが引き込む課題です。

それを持ち寄って、人が人として生きることができ、尊厳を認め合い、違いを認め合う、主体性を育み合う、あらゆる垣根を飛び越えて、ですね、それを喜び、共有し、発信していく、そのような開かれた関係の拠点として、今後も仙台 YWCA さんがあり続けていかれることを、心から期待しております、し、そのお働きによって、この社会全体が、日本が、そして世界が、そのような関係性に開かれていったらどんなに良いか、そこに参与することの喜びはどれだけ大きいのか、そのことを今朝、今一度確認し合いたいと、願うのであります。

祈り

主なる神様、このように、仙台 YWCA に集うみなさんと共に、礼拝を過ごすことができましたことを、感謝いたします。

ここに集ったお一人お一人の上に、主の豊かな祝福と顧みがありますよう、切にお祈り申し上げます。

主よ、世界が揺れ動いています。主義、主張を力で相手をねじ伏せようとする戦いや争いが絶えません。今も大切な命が奪われ、踏み躪られています。

願わくは、自分の国や自分の側にしか正義がないと信じ込む、愚かな過ちを正してくださいますように。

去る1月1日に、大変な災害が起こった能登半島の方々を覚えます。

多くの方々が亡くなられ、今なお、大変な思いをしている方々がいらっしゃいます。

その状況の中、あなたは、悲しみに途方に暮れている一人一人の傍で、共に泣き、途方に暮れておられることを覚えます。

どうか、あなたを後追いする私たちとしてください。泣くものと共に泣く、あなたにある共感の思いに私たちが生きることができますように。

これから、仙台YWCAさんの総会が行われようとしています。

イエスが表されたあなたのみ旨を体現し、世に表していく、そのような活動を皆で喜び合っていく、開かれた話し合いになりますように、そして、そのために、あなたからの働きかけが、お一人お一人の上に、豊かにありますよう、切にお願い申し上げます。

私たちの救い主イエスキリストによって、祈ります。